

令和8年1月

大 阪 市 医 学 会
会 長 鶴 田 大 輔

令和7年度 大阪市医学会 第4回鈴木衣子賞・第71回学会賞 授与式を下記のとおり開催致しますので、万障お繰り合せの上ご出席を賜りますようご案内申し上げます。

記

日 時： 令和8年3月19日（木）午後4時00分（予定）～
（進行の都合により、少し早まったり、遅くなったりする可能性があります）

場 所： 大阪公立大学医学部学舎4F・大講義室

※ 平成29年度より学位授与式とは別の日の開催となり、「Teacher of the Year」
「医学部長賞」授与式に引続き、同会場におきまして授与式を挙行政致します。

大阪市医学会 第4回鈴木衣子賞・第71回学会賞 授与式次第

開 式 の こ と ば

1. 大阪市医学会 第4回鈴木衣子賞・第71回学会賞 選考の経過報告
2. 大阪市医学会 第4回鈴木衣子賞・第71回学会賞 授与
3. 会 長 挨 拶

閉 式 の こ と ば

財 団 法 人	報 国 積 善 会	理 事 長	大 森 尚 氏	協 賛 副 賞 授 与
大 阪 公 立 大 学	医 学 部 医 師 会	会 長	鶴 田 大 輔 氏	協 賛 副 賞 授 与
大 阪 市 役 所	医 師 会	会 長	細 井 雅 之 氏	協 賛 副 賞 授 与

令和7年度 大阪市医学会 第4回鈴木衣子賞・第71回学会賞 論文等選考経過

1. 選 考 委 員

選考委員長		三木 幸雄	教授
選考委員	基礎医学部門	城戸 康年	教授
		金子 幸弘	教授
		鈴木 周五	教授
	臨床医学部門	森 潤	大阪市立総合医療センター小児代謝内分泌内科部長
		孝橋 賢一	教授
		柏木伸一郎	教授
	公衆衛生・疫学部門	福島 若葉	教授
		田端 信忠	大阪市健康局医務監兼保健所医務主幹
		檜垣 史郎	大阪市保健所東部保健医療監兼中央区役所医務主幹

2. 応募期限・対象論文・応募資格・選考方法・選考基準・受賞後の規定等

- 1) 応募期間は令和7年6月27日(金)から同年9月1日(月)までとする。
- 2) 応募論文を選考委員会で審査し、大阪市医学会 鈴木衣子賞1名、大阪市医学会 学会賞3グループを大阪市医学会理事会において決定とする。
- 3) 鈴木衣子賞について：
 - ① 本学の関係者で学内外に関わらず、国際的に評価される優れた業績を上げている若手医師、研究者を表彰する。
 - ② 大阪市医学会会員歴が応募の時点で4年以上ある者、大阪市立大学あるいは大阪公立大学医学部卒業生、大阪市立大学あるいは大阪公立大学大学院医学研究科博士課程を修了した者。
 - ③ 令和8年3月31日時点で50歳未満である者。但し、本学大学院医学研究科の教授は対象外とする。
 - ④ 会長賞(市長賞)を既に受賞された筆頭著者は、選考対象としない。
 - ⑤ 受賞者は、受賞後に15分程度の講演(Webセミナーも可)をしていただく。
- 4) 学会賞について：
 - ① 大阪市医学会雑誌、Osaka City Medical Journal、あるいはその他の学術雑誌に令和5年10月1日から令和7年8月31日までの間に掲載された論文に限る。
 - ② 応募論文の著者(筆頭著者、共著者全員)は、応募の時点で大阪市医学会会員であること。
 - ③ 研究内容が、大阪市医学会例会または大阪市役所医師会例会に報告されたもの(11月例会発表予定を含む)。
 - ④ 大阪公立大学内の同一大学院講座からの応募は一件とし、所属長のサインは必要だが、学外はこの限りではない。
 - ⑤ 「大阪市・市大・大阪公立大学医学部」関係の先生が「大阪市関連の所属機関」で研究したものに限る。なお、大阪市役所医師会例会に発表していても大阪市医学会例会に発表していない受賞論文は授与式までに大阪市医学会例会で発表する。大阪公立大学医学部所属の方については、必ず例会発表後に応募する。
 - ⑥ 部門は「基礎部門」「臨床部門」「公衆衛生・疫学部門(臨床疫学を含む)」に分れている。応募された論文の部門は、選考委員会で変更する場合がある。
 - ⑦ 会長賞(市長賞)を既に受賞された方(筆頭著者のみ)は、選考対象としない。また、学会賞(筆頭著者のみ)の受賞は3回までとする。
- 5) 鈴木衣子賞と学会賞の2つに応募されても、受賞されるのは1つとする。
- 6) 受賞者は、やむを得ない理由がない限り、授与式(令和7年3月13日予定)には原則出席することとする。
- 7) 鈴木衣子賞(1名)には盾と副賞100万円、学会賞(3グループ)には各グループに賞状と副賞10万円が授与される。

3. 選 考 経 過

令和4年度より応募規定が変更となり、第1回選考委員会において応募論文の選考の仕方等を決め、選考委員長・選考委員全員での評価とすることとした。第2回選考委員会で最終審議をした結果、大阪市医学会鈴木衣子賞受賞候補者1～2名、大阪市医学会 学会賞受賞候補グループ、3グループを大阪市医学会理事会に答申した。この答申結果は、大阪市医学会理事会で審議され、本年度は、鈴木衣子賞受賞者は2名、学会賞受賞グループは3グループと決定した。

令和7年 6月18日(水) 第1回理事会
令和7年 9月29日(水) 第1回選考委員会
令和7年 11月17日(月) 第2回選考委員会
令和7年 12月17日(水) 第3回理事会(報告、審議、決定)

4. 選 考 理 由

大阪市医学会 鈴木衣子賞

細見周平 氏

鈴木衣子賞には本年度3名の応募があった。その中で細見周平氏は、炎症性腸疾患 (IBD) と腸管免疫学を中心とした研究において、基礎から橋渡し、さらに疫学研究に至るまで一貫して幅広い研究を展開し、国際的にも極めて高い評価を受ける業績を挙げてきた。

特に、腸管上皮細胞における小胞体ストレスが腸管免疫応答や粘膜恒常性維持に果たす役割を明らかにした一連の研究は独創性に富み、2019年には Science 誌に **equally contributed** の筆頭著者として発表されるなど、その学術的インパクトは極めて大きい。さらに Journal of Crohn's and Colitis や The Journal of Experimental Medicine などの高インパクト誌にも主要論文を発表し、IBD の病態解明に重要な貢献を果たしている。

近年は、レセプトデータを用いた疫学研究にも責任著者として取り組むなど、基礎的実験研究とデータ解析研究の両面から研究領域を拡張し、後進の育成にも積極的であり、将来性の高さも際立っている。基礎的探究にとどまらず、臨床応用を強く意識した研究姿勢は、本学の医学研究の発展に大きく寄与するものと評価された。

以上のように、細見氏の研究は独創性、国際的評価、研究の深さと広がり、ならびに本学への貢献のいずれの点においても極めて高水準にあり、提出論文を含めた総合的判断において、本賞にふさわしい業績であると認められた。

廣田圭司 氏

廣田圭司氏は、Th17 細胞を中心とする免疫学および自己免疫疾患研究の分野において、世界をリードする水準の独創的かつ先駆的な研究成果を挙げてきた。

廣田氏は、Th17 細胞の可塑性や分化・機能制御機構、さらに IgA 抗体産生への関与など、免疫学の根幹に関わる重要課題に取り組み、Nature Immunology 誌および Immunity 誌といったトップジャーナルに筆頭著者として一連の代表論文を発表している。これらの論文は引用数も極めて高く、国際的に大きな影響を与えており、Th17 研究の発展に決定的な貢献を果たしたものと評価される。

主要論文の発表年は2011年から2018年に及ぶが、その後も責任著者として高インパクト誌への論文発表を継続し、独立した研究者として研究を主導するとともに、若手研究者の育成や共同研究の推進にも顕著な役割を果たしている。基礎研究成果を将来的な病態理解や治療応用へとつなげる橋渡し研究としての発展性も高く評価された。

以上より、廣田氏の業績は国際的評価、独創性、学術的インパクトのいずれにおいても極めて卓越しており、細見氏と甲乙つけがたい水準にあると判断された。総合評価の結果、本年度は上位2名を同時受賞とすることが適当と判断し、ここに廣田氏も鈴木衣子賞を授与されるに値するものと認められた。

大阪市医学会 鈴木衣子賞 受賞対象研究業績の要約

「細見周平氏の“外的感覚刺激と小胞体ストレス応答の相互連関による腸管上皮恒常性制御機構の解明”の要約」

大阪公立大学 大学院医学研究科 消化器内科学

受賞者は2002年に大阪市立大学医学部医学科を卒業し、同大学内科学第三（現消化器内科学）教室に入局した。2009年に博士（医学）の学位を取得した後、大阪市立大学医学部附属病院、大阪公立大学大学院医学研究科 消化器内科学等での勤務を経て、2024年に准教授に就任。現在、同教室において研究活動を行っている。

受賞者のこれまでの主な業績は以下の通りである。

変性タンパク質の小胞体への蓄積で生じる小胞体ストレス（ER ストレス）は、炎症性腸疾患患者の腸管において亢進していることが報告されており、腸管の炎症形成に関与することが種々の基礎的研究で証明されている。この ER ストレスは腸内微生物叢構成の異常や高脂食などの食餌抗原の暴露によって誘導されることが知られている。これら背景から、各種外的刺激が ER ストレスの誘導を介して、腸管恒常性維持機構の破綻をきたし炎症性腸疾患発症に関与していると仮説をたて、基礎的研究、橋渡し研究、ならびに、臨床データベースを用いた疫学的研究をおこなってきた。

◆ER ストレスとオートファジー、そして腸炎発症との相互関係の研究

Xbp1 とオートファジー必須分子（Atg7、Atg16l1）の腸管上皮特異的ダブルノックアウトマウスを用いて、両遺伝子の相補的な作用が小腸恒常性維持に重要であることを示した。また、新たに作成したパネート細胞特異的 Xbp1 ノックアウトマウスを用いて、Xbp1 欠損による自然発症腸炎がパネート細胞を起点として誘導されることを見出した（Adolph TE, et al. *Nature*. 2013. Niederreiter L, et al. *J Exp Med*. 2013）。

◆ER ストレス応答による NKG2D リガンド発現機構と腸炎への関与の解明

この研究では腸上皮特異的 Xbp1 欠損マウスの自然発症腸炎における group 1 innate lymphoid cells の（ILC1）を介した免疫応答を詳細に評価し、腸管上皮間リンパ球中の ILC1 の増加と自然免疫細胞活性化レセプター NKG2D の発現亢進を確認した。その誘導メカニズムの探索の結果、NKG2D のリガンドの一つである MULT1 が Xbp1 欠損腸上皮細胞や ER ストレス刺激下の腸上皮細胞で誘導されていることが明らかとなった。さらに ILC1 が腸炎惹起に関与していることを証明した（Hosomi S, et al. *J Exp Med*. 2017）。

◆腸管 ER ストレスに対する免疫応答と腸炎発症メカニズム解明

腸管 ER ストレスによる上皮間リンパ球、粘膜固有層肥満細胞を中心とした免疫ネットワーク誘導メカニズム解明を目的として研究を行った。腸管 ER ストレスが、腸内細菌叢や T 細胞非依存的に IgA 産生を誘導し、腸管炎症保護的に作用することを発見した。また、ER ストレス応答性転写因子である ATF4 が上皮成長因子受容体のリガンドである Amphiregulin を誘導することも明らかとした。Amphiregulin 発現はクローン病患者でも発現亢進しており、病態に関与している可能性が示唆された（Grootjans J†, Krupka N†, Hosomi S†（†Co-First authors）et al, *Science*. 2019）。

◆ヒトヘルペスウイルス感染合併炎症性腸疾患の長期予後の検討

炎症性腸疾患の内視鏡検査時生検サンプルを用いて、multiplex-PCR でヒトヘルペスウイルス感染の有無を評価し、サイトメガロウイルス・EB ウイルス・HHV-6 の重複陽性症例が臨床的予後不良因子であることを証明した（Hosomi S, et al. *Inflamm Bowel Dis*. 2018. Hosomi S, et al. *Microorganisms*. 2021）。

◆炎症性腸疾患の活動性と炎症・敗血症マーカーの相関についての検討

Soluble CD14 subtype (sCD14-ST) および soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) 血中濃度と、炎症性腸疾患の臨床的・内視鏡的活動性との相関を検討した。クローン病では sCD14-ST が臨床的・内視鏡的活動性と正の相関を有することを示した（Hosomi S, et al. *J Crohns Colitis*. 2018）。

◆本邦のレセプトデータベースを用いた炎症性腸疾患の疫学的研究

Medical Data Vision database を用い、分子標的治療薬へのメサラジン製剤併用療法の有効性、分子標的治療の活動性結核発症リスク検討を行った（Nishida Y, Hosomi S, et al. *Inflamm Bowel Dis*. 2025. Nishida Y, Hosomi S, et al. *J Gastroenterol Hepatol*. 2025. Fujimoto K, Hosomi S, et al. *Intest Res*. 2024）。

「廣田圭司氏の“炎症性 T 細胞による病態制御機構の解明”の要約」

京都大学 医生物学研究所 統合生体プロセス分野

受賞者は2002年に大阪市立大学医学部医学科を卒業し、同年、京都大学大学院医学研究科 病理系専攻に入学。京都大学再生医科学研究所研究員を経て、2007年に博士（医学）の学位を取得した。その後、英国 MRC National Institute for Medical Research 研究員、大阪大学免疫学フロンティア研究センター准教授、京都大学再生医科学研究所准教授を経て、2022年に同大学医生物学研究所の准教授に就任。現在、同研究所において研究活動を行っている。

受賞者のこれまでの主な業績は以下の通りである。

これまで一貫して制御性 T 細胞による免疫寛容維持機構および炎症疾患モデルにおけるインターロイキン(IL)-17 を産生する炎症性 T ヘルパー (Th17) 細胞の分化・制御機構の研究に取り組んできた。2006 年頃より第三の T ヘルパーサブセットとして国際的に認知されつつあった Th17 細胞に当時着目し、大学院学生およびその後研究員として研究に取り組んだ。自己免疫性関節炎モデルを中心に関節炎惹起性 Th17 細胞の分化、遊走の制御機構および自然免疫機構による Th17 細胞の活性化機序について報告した (*J Exp Med.* 2010, *J Exp Med.* 2007)。

留学先では、Th17 細胞サブセット選択的に発現する転写因子 (Aryl hydrocarbon receptor: Ahr) による Th17 細胞エフェクター機能の制御機構、細胞外病原体の菌体成分刺激と Ahr 活性化を介した生体防御機構、必須アミノ酸トリプトファン代謝産物による Ahr 活性化による Th17 細胞の機能調節機構を明らかにした (*J Exp Med.* 2009, *Immunity.* 2009, *Nature.* 2008)。また、Th17 細胞を生体内で追跡可能にする細胞系譜レポーターマウスを世界に先駆けて開発し、生体組織・炎症臓器に特異的な細胞間相互作用、外部環境因子依存的な Th17 細胞の高い可塑性と付随する生理的・病理的意義を明らかにした (*Nat Immunol.* 2013, *Nat Immunol.* 2011)。急性アレルギー炎症モデルでの IL-9 産生細胞の細胞動態と制御機構についても報告した (*Nat Immunol.* 2011)。

帰国後、関節炎の原因となりうる新規自己抗原の一つとして Rpl23a を報告した (*Science.* 2014)。

現所属に異動後、組織炎症の慢性化維持メカニズムとして、Th17 細胞を起点とした炎症カスケードの構成細胞 (新規に見いだした滑膜自然リンパ球など) および、それらの制御因子を見いだした (*Immunity.* 2018)。また、自己免疫疾患惹起性の GM-CSF 産生 Pathogenic Th17 細胞のエフェクター機能を特異的に制御する転写調節因子 Satb1 の役割を明らかにした (*Nat Commun.* 2019)。最近、Th17 細胞応答を制御するサイトカインである IL-23 を発現する細胞を可視化するため、IL-23-Venus レポーター系統を新規に樹立し、病原性大腸菌の生体防御反応に必須の IL-23 産生樹状細胞の分化と機能に関わる制御機構を明らかにした (*J Exp Med.* 2024)。

このように、炎症疾患モデルを中心に用い、炎症免疫応答を担当する IL-23 産生細胞と Th17 細胞の分化およびそのエフェクター制御機構の研究を発展させてきた。また、疾患標的臓器における組織炎症の慢性化機序、疾患関連 T 細胞とその認識自己抗原を同定することで自己免疫疾患の臓器特異性の決定機構の理解を深めてきた。マウスモデルとヒト自己免疫疾患の患者検体を用いて双方向性に検証をおこない、組織炎症の新しい概念と自己免疫疾患に対する新しい免疫学的制御法の開発に向けた分子基盤を確立してきた。

大阪市医学会 学会賞 受賞論文抄録

「瀬戸川将他 12 名の論文抄録」

Acquisition of Auditory Discrimination Mediated by Different Processes through Two Distinct Circuits Linked to the Lateral Striatum (背側線条体の 2 つの異なる神経回路を介した聴覚弁別の学習獲得プロセス)

1) 大阪公立大学 大学院医学研究科 神経生理学、2) 福島県立医科大学 医学部附属生体情報伝達研究所 生体機能研究部門、3) 理化学研究所 生命機能科学研究センター 生体機能動態イメージング研究チーム、4) 日本学術振興会 特別研究員 (PD)、5) 量子科学技術研究開発機構 脳機能イメージング研究センター、6) 京都橘大学 健康科学部 臨床検査学科、7) 理化学研究所 生命機能科学研究センター 分子標的化学研究チーム、8) 産業技術総合研究所 健康医工学研究部門、9) 神戸学院大学 薬学部 神経精神薬理研究室/京都大学大学院医学研究科附属 脳機能総合研究センター、10) 広島大学 大学院医系科学研究科 口腔生理学、11) 東京大学 大学院総合文化研究科 先進科学研究機構、12) 大阪市立大学 大学院医学研究科 神経生理学

瀬戸川将^{1,2,3,4,12)}、岡内 隆⁵⁾、胡 迪⁶⁾、和田康弘⁷⁾、疋島啓吾⁸⁾、尾上浩隆⁹⁾、西澤佳代²⁾、酒寄信幸¹⁰⁾、宮脇寛行^{1,12)}、北西卓磨^{11,12)}、水関健司^{1,12)}、崔 翼龍³⁾、小林和人²⁾

【目的】大脳基底核の主要な神経核である線条体は、運動・認知・知覚に関与する複数の独立した亜領域から構成されており、各亜領域が固有の学習機能を担うことが明らかにされている。しかし、外界からの情報と行動を結びつけるような学習には多様な情報処理が求められることから、複数の亜領域が協調的に関与している可能性がある。本研究では、線条体亜領域が連合学習を駆動するメカニズムを明らかにすることを目的とした。

【方法】実験動物は、Long-Evans ラットを用いた。学習課題には、異なる周波数の音刺激を区別し、正しい反応に対して報酬を与える聴覚弁別課題を採用した。学習過程における神経活動記録には、小動物脳機能イメージング法と細胞外神経活動記録法を用いた。さらに、薬理学的手法による脳機能解析には、イボテン酸とムシモールを用いた。

【結果】脳機能イメージング実験では、前部背外側線条体 (aDLS) および後部腹外側線条体 (pVLS) の脳活動が学習初期と後期に増加することを明らかにした。薬理学実験では、aDLS と pVLS の活動が学習に必須であることを示した。さらに行動パターンの解析から、aDLS は前試行の行動結果をもとにした戦略を、pVLS は刺激と反応の連合に基づく戦略を担うことが示された。最後に、神経活動記録実験により、aDLS は学習初期に行動結果を反映した学習関連情報を処理し、pVLS は学習後期にかけて記憶の形成および保持に関与する情報を処理していることが明らかとなった。

【結論】本研究の結果から、線条体の複数の亜領域が、聴覚連合学習を時空間的に異なる機能分担によって支えている可能性が示唆された。

「松下 周他 11 名の論文抄録」

Comparison of Clinical and Radiological Characteristics of Inflammatory and Non-inflammatory Rathke Cleft Cysts (炎症の有無によるラトケ嚢胞の臨床的・画像的特徴の比較)

1) 大阪公立大学 大学院医学研究科 放射線診断学・IVR 学、2) 大阪南医療センター 放射線診断・IVR 科、3) 大阪市立総合医療センター 脳神経外科、4) 大阪公立大学 大学院医学研究科 脳神経外科学

松下 周¹⁾、下野太郎¹⁾、前田裕之¹⁾、塚本太朗²⁾、堀内大右¹⁾、大浦達史¹⁾、石橋謙一³⁾、田北大昂¹⁾、立川裕之¹⁾、熱川奈津子¹⁾、後藤剛夫⁴⁾、三木幸雄¹⁾

【目的】ラトケ嚢胞はトルコ鞍部に発生する嚢胞性病変で、日常的によく遭遇する病変である。症候性のラトケ嚢胞では病理学的に嚢胞壁の炎症が確認されることがあり、症状や再発率と関連することが知られている。嚢胞壁の MRI での造影効果は炎症と関連しているものの、その範囲や頻度については明らかとなっていない。本研究の目的は、炎症性ラトケ嚢胞と非炎症性ラトケ嚢胞の臨床的および画像的差異を明らかにすることである。

【対象】2008 年 1 月から 2022 年 7 月までに大阪市立大学医学部附属病院および大阪市立総合医療センターで症候性ラトケ嚢胞に対して嚢胞減圧手術を受けた 41 人の患者。

【方法】病理レポートに基づき、患者を炎症性グループと非炎症性グループに分類した。臨床症状、内分泌学的評価、嚢胞内容の性状に関する情報はカルテより収集した。定量的画像所見 (平均 CT 値、病変最大径、見かけの拡散係数 [ADC] 値)、定性的画像所見 (石灰化、部位、進展範囲、形態、T1 強調像および T2 強調像での信号強度、parasellar T2 dark sign、液面形成、嚢胞内結節、せき止め現象、造影効果の範囲、壁の厚さ、下垂体茎肥厚、周囲骨髄の造影効果) に関して 3 人の画像診断医が評価し、2 群間での検討を行った。また、ADC 値に対して ROC 解析を行った。

【結果】炎症性グループは 21 例、非炎症性グループは 20 例であった。ADC 値は 28 例で評価可能であった。炎症性グループでは、中枢性尿崩症の発症率が高く、白濁した嚢胞内容を呈する頻度が高かった。また、ADC 値が有意に低く、造影 MRI での嚢胞壁の造影効果がより広範囲であった。炎症性グループでは全例で一部ないし全周性の嚢胞壁造影効果が確認され、壁が厚く造影されていた症例も存在した。その他の画像所見には有意差はみられなかった。2 群間の ADC カットオフ値は $1.57 \times 10^{-3} \text{ mm}^2/\text{s}$ で、感度 81.3%、特異度 66.7%であった。

【結論】炎症性ラトケ嚢胞は中枢性尿崩症の発症率が高く、白濁した嚢胞内容を呈する傾向があった。画像所見的には、平均 ADC 値が低く、嚢胞壁の造影効果が広いことが確認された。

「小西絢子 他 17 名の論文抄録」

Adverse Reactions Following First Three Doses of the BNT162b2 mRNA COVID-19 Vaccine: A Prospective Cohort Study on Relationships with Individual Characteristics and Previous Experience of Adverse Reactions (BNT162b2 mRNA COVID-19 ワクチン 1 回目から 3 回目接種後の副反応: 個人特性および過去に経験した副反応との関連についての前向きコホート研究)

1) 大阪公立大学 大学院医学研究科 公衆衛生学、2) 大阪公立大学本部事務機構 総合技術部総合技術課生命科学部門 医学機能系グループ生物統計、3) 北大阪病院内科、4) 大阪市立大学 大学院医学研究科 公衆衛生学、5) 大阪公立大学 大学院医学研究科 ウイルス学、6) 大阪公立大学 大学院医学研究科 寄生虫学、7) 大阪公立大学 大学院医学研究科 細菌学、8) 大阪公立大学 大学院医学研究科 皮膚病態学、9) 国際医療福祉大学大学院/医学部医療の質・安全学、10) 大阪公立大学 大学院医学研究科 臨床感染制御学、11) 医療法人相生会 臨床疫学研究センター

小西絢子¹⁾、福島若葉¹⁾、松浦知香¹⁾、大藤さとし¹⁾、加瀬哲男¹⁾、近藤亨子²⁾、松本一寛³⁾、吹田安佐詠¹⁾、迎恵美子¹⁾、笠松彩音⁴⁾、城戸康年⁵⁾、中釜 悠⁶⁾、仁田原裕子⁵⁾、金子幸弘⁷⁾、金子 明⁸⁾、山口悦子⁹⁾、掛屋 弘¹⁰⁾、廣田良夫¹¹⁾

【目的】BNT162b2 mRNA COVID-19 ワクチン (以下、BNT162b2 ワクチン) 1~3 回目接種後の副反応 (局所および全身反応) の発現頻度と重症度を評価し、個人特性および過去に経験したワクチン接種後副反応との関連を明らかにする。

【方法】大阪公立大学医学部附属病院の医療従事者等を対象に実施した 2 件の前向きコホート研究に参加し、BNT162b2 ワクチン 1~3 回目接種を全て完了した 218 名 (女性 79%、年齢中央値 46.5 歳) を対象とした。自記式電子質問票により、個人特性 (性、年齢、体格、アレルギー歴、喫煙・飲酒習慣、基礎疾患)、および BNT162b2 ワクチン接種後の副反応発現状況 (局所 6 症状、全身 9 症状) と重症度 (なし/軽度/中等度/重度) の情報を収集した。修正ポアソン回帰モデルを用い、BNT162b2 ワクチン接種後の中等度以上の局所および全身の副反応を従属変数として、個人特性および過去に経験した副反応の相対リスクを算出した。

【結果】局所反応は 91~96% (中等度以上 27~43%)、全身反応は 56~88% (中等度以上 19~56%) に認めた。過去の接種で中等度以上の局所反応を経験した者は、その後の接種で中等度以上の局所反応を呈する相対リスクが有意に高かった (2 回目接種に対して 2.32 [95%信頼区間: 1.52-3.55]、3 回目接種に対して 1.89 [1.33-2.69])。同様に、過去の接種で中等度以上の全身反応を経験した者は、その後の接種で中等度以上の全身反応を呈する相対リスクが高かった (2 回目接種に対して 1.31 [0.99-1.72]、3 回目接種に対して 2.18 [1.56-3.06])。その他の個人特性との関連も一部で認められたが、一貫したパターンは確認されなかった。

【結論】過去の BNT162b2 ワクチン接種後に経験した局所反応と全身反応は、それぞれ、その後の BNT162b2 ワクチン接種後の局所反応と全身反応に関連する可能性がある。

令和 7 年度 大阪市医学会
第4回 鈴木衣子賞・第71回 学会賞
受 賞 者

【大阪市医学会 鈴木衣子賞】

氏名・所属

細見 周平

(大阪公立大学 大学院医学研究科 消化器内科学)

研究題目

外的感覚刺激と小胞体ストレス応答の相互連関による腸管上皮恒常性制御機構の解明

代表論文 掲載誌および発刊年

① Epithelial Endoplasmic Reticulum Stress Orchestrates a Protective IgA Response

Science 2019;363:993-998

② Sepsis Markers Soluble IL-2 Receptor and Soluble CD14 Subtype as Potential Biomarkers for Complete Mucosal Healing in Patients with Inflammatory Bowel Disease

Journal of Crohn's and Colitis 2018;12:87-95

③ Intestinal Epithelial Cell Endoplasmic Reticulum Stress Promotes MULT1 Up-regulation and NKG2D-mediated Inflammation

The Journal of Experimental Medicine 2017;214:2985-2997

氏名・所属

廣田 圭司

(京都大学 医生物学研究所 統合生体プロセス分野)

研究題目

炎症性T細胞による病態制御機構の解明

代表論文 掲載誌および発刊年

① Autoimmune Th17 Cells Induced Synovial Stromal and Innate Lymphoid Cell Secretion of the Cytokine GM-CSF to Initiate and Augment Autoimmune Arthritis

Immunity 2018;48:1220-1232

② Plasticity of TH17 Cells in Peyer's Patches is Responsible for the Induction of T Cell-dependent IgA Responses

Nature Immunology 2013;14:372-379

③ Fate Mapping of IL-17-producing T Cells in Inflammatory Responses

Nature Immunology 2011;12:255-263

【大阪市医学会 学会賞】

氏名・所属

瀬戸川将	(大阪公立大学 大学院医学研究科 神経生理学)
岡内 隆	(量子科学技術研究開発機構 脳機能イメージング研究センター)
胡 勉	(京都橘大学 健康科学部 臨床検査学科)
和田康弘	(理化学研究所 生命機能科学研究センター 分子標的化学研究チーム)
疋島啓吾	(産業技術総合研究所 健康医工学研究部門)
尾上浩隆	(神戸学院大学 薬学部 神経精神薬理学研究室)
西澤佳代	(福島県立医科大学 医学部附属生体情報伝達研究所 生体機能研究部門)
酒寄信幸	(広島大学 大学院医系科学研究科 口腔生理学)
宮脇寛行	(大阪公立大学 大学院医学研究科 神経生理学)
北西卓磨	(東京大学 大学院総合文化研究科 先進科学研究機構)
水関健司	(大阪公立大学 大学院医学研究科 神経生理学)
崔 翼龍	(理化学研究所 生命機能科学研究センター 生体機能動態イメージング研究チーム)
小林和人	(福島県立医科大学 医学部附属生体情報伝達研究所 生体機能研究部門)

論文題目

Acquisition of Auditory Discrimination Mediated by Different Processes through Two Distinct Circuits Linked to the Lateral Striatum

(背側線条体の2つの異なる神経回路を介した聴覚弁別の学習獲得プロセス)

掲載誌および発刊年

Elife 2025;13:RP97326

氏名・所属

松下 周・下野太郎・	
前田裕之	(大阪公立大学 大学院医学研究科 放射線診断学・IVR学)
塚本太朗	(大阪南医療センター 放射線診断・IVR科)
堀内大右・大浦達史	(大阪公立大学 大学院医学研究科 放射線診断学・IVR学)
石橋謙一	(大阪市立総合医療センター 脳神経外科)
田北大昂・立川裕之・	
熱川奈津子	(大阪公立大学 大学院医学研究科 放射線診断学・IVR学)
後藤剛夫	(大阪公立大学 大学院医学研究科 脳神経外科学)
三木幸雄	(大阪公立大学 大学院医学研究科 放射線診断学・IVR学)

論文題目

Comparison of Clinical and Radiological Characteristics of Inflammatory and Non-inflammatory Rathke Cleft Cysts

(炎症の有無によるラトケ嚢胞の臨床的・画像的特徴の比較)

掲載誌および発刊年

Japanese Journal of Radiology 2025;43:32-42

【大阪市医学会 学会賞】

氏名・所属

小西絢子・福島若葉・

松浦知香・大藤さとこ・

加瀬哲男 (大阪公立大学 大学院医学研究科 公衆衛生学)

近藤亨子 (大阪公立大学本部事務機構 総合技術部総合技術課 生命科学部門
医学機能系グループ生物統計)

松本一寛 (北大阪病院 内科)

吹田安佐詠・迎恵美子 (大阪公立大学 大学院医学研究科 公衆衛生学)

笠松彩音 (大阪市立大学 大学院医学研究科 公衆衛生学)

城戸康年 (大阪公立大学 大学院医学研究科 ウイルス学)

中釜 悠 (大阪公立大学 大学院医学研究科 寄生虫学)

仁田原裕子 (大阪公立大学 大学院医学研究科 ウイルス学)

金子幸弘 (大阪公立大学 大学院医学研究科 細菌学)

金子 明 (大阪公立大学 大学院医学研究科 皮膚病態学)

山口悦子 (国際医療福祉大学 大学院 医学部医療の質・安全学)

掛屋 弘 (大阪公立大学 大学院医学研究科 臨床感染制御学)

廣田良夫 (医療法人相生会 臨床疫学研究センター)

論文題目

Adverse Reactions Following First Three Doses of the BNT162b2 mRNA COVID-19 Vaccine:
A Prospective Cohort Study on Relationships with Individual Characteristics and Previous
Experience of Adverse Reactions

(BNT162b2 mRNA COVID-19ワクチン1回目から3回目接種後の副反応: 個人特性および過去に
経験した副反応との関連についての前向きコホート研究)

掲載誌および発刊年

Human Vaccines & Immunotherapeutics 2025;21:2518646